



Title	上田秋成の研究 : 朝鮮をめぐる秋成国学の世界
Author(s)	姜, 錫元
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39591
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	姜 錫 元
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 2 5 9 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 8 年 3 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	上田秋成の研究 ——朝鮮をめぐる秋成国学の世界——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 子安 宣邦 (副査) 教 授 小松 和彦 教 授 伊井 春樹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、〈朝鮮問題〉という近世の国学系の議論、言説においていわば隠蔽され、伏せられた問題を顕在化させることを通じて、国学の思想的言説の特質を、ことに本居宣長（1730－1801）との論争によって示される上田秋成（1734－1809）の近世国学思想に占める独自の位相を明かにするものである。本論文は序章および三章から構成されている。秋成と宣長との論争を主題とする第二章が本論文の中心をなしている。

序章

『雨月物語』の著者上田秋成は単なる読本作者というよりは、時代に独自の知的思想的スタンスをもって対した文人・学者であった。本論文は近世18世紀における秋成の国学的発言の意味を、彼の国学者としての独自の思想的立場から明かにすることを目的としている。その際、国学思想の分析にとってもつ〈朝鮮問題〉という視角の重要性がいわれる。〈朝鮮問題〉を視角とした国学研究は皆無であり、それは研究史上においても伏せられてきた問題であったことが指摘される。

第一章 秋成と朝鮮通信使

「通信使との唱和」「崔天宗事件への視座」の二節からなる本章は、〈朝鮮問題〉を視角とした秋成の思想世界へのアプローチのいわば導入部をなしている。朝鮮は江戸時代において日本と善隣友好の関係にあった国であり、慶長12年（1607）から200年にわたり朝鮮は12回の使節を日本に送っている。この使節団の来訪と江戸への旅程における大坂滞在は、大坂において大きなイベントとして上下に迎えられた。「唐人を二度見た事とし忘れ」の句を引きながら秋成も『胆大小心録』で朝鮮使節に言及する。ところで秋成も指摘するが、「韓人」であるはずの朝鮮使節はこの句に見るように一般に「唐人」と呼ばれていた。また彼らとの詩の応酬や詩文の揮毫を求めて押し掛ける文人・士人たちの意識においても、朝鮮使節は中華帝国とその文化の代理人として存在し、独立した国としての朝鮮の使節であるとの意識は希薄であった。他方、朝鮮側も接触を求めて押し掛けてくる日本人に対し文化的なレベルでの落差を認め、文化的優越を自覚していた。明和元年（1764）、大坂に滞在中の使節団の一員崔天宗が日本人に殺害されるという事件が起きる。その事件への日本側の対応、事件の風聞を通じて筆者は、使節団をめぐる当時の生々しい事情を伝えている。この事件をめぐる秋成が「公儀といふものは、むごいものじや」という人の口をかりていう言葉に、彼がとる権威への特異なスタンスを筆者は読み取っている。

第2章 「日の神」論争と朝鮮

本章は「日の神」論争として知られる秋成と宣長との間に交わされた論争を詳細に追跡しながら、宣長の国学的立場と差異する秋成の思想的立場を明かにし、それらを通して彼らにおける朝鮮への差異する視線を浮び上がらせる。この秋成・宣長間の思想上著名な論争は、藤貞幹（1732-1797）の著す『衝口発』に宣長が『鉗狂人』で過剰に反応したことに始まる。この宣長のきわめて感情的でイデオロギー的な反応に秋成が『鉗狂人上田秋成評』で応じ、さらにそれを宣長が『鉗狂人上田秋成評同弁』で反論したのがこの論争の経緯である（宣長の論争書『呵刈菰』は後の二者によって構成されている）。藤貞幹の『衝口発』は日本やことに朝鮮の古代史料・言語的知識によって日本神話・古史を脱神話的に批判した書である。朝鮮古代「三国」の年代との対比による神武紀の年代上の疑点、素戔鳴尊の辰韓出身説、さらに日本古代の習俗、言語、官制名における朝鮮からの強い影響などを指摘し、貞幹は朝鮮との関連のもとに日本古代史を描いて見せる。この貞幹の『衝口発』に宣長が過剰に反応したところから秋成との論争が始まる。ということは、この論争の始まりには日本神話・古代理解における〈朝鮮問題〉が存在したということである。だがこの〈朝鮮問題〉は宣長に過剰な反応をもたらしながら、しかし〈朝鮮問題〉は論争過程で直接に触れられることなく、また主題的に言及されることもなく、論争の背後に伏せられていく。しかし宣長の過敏な反応は、日本古代史と国学者の古代理解における朝鮮の問題の重大性を逆に知らしめる。宣長はたとえば古代言語における朝鮮語の混入・影響という問題提起に直接に答え、対応することを避けて、逆に日本の神の究極性、日本神話の優越性、したがって日本の朝鮮に対する国家的優越性をきわめてイデオロギー的に主張することで反論する。そして自国（日本）への反動的な言語を発する貞幹を「狂人」とみなすのである。秋成はこの宣長の過剰な反応に、尊大な自国中心主義的な狹隘さを見て、批判する。さらにそれに宣長が反批判を加えていく。本論文はこの論争の経過、すなわち〈朝鮮問題〉に端を発しながら、しかし〈朝鮮問題〉に直接対応することなく、日本とその古代への自国中心主義視線の当否をめぐる論争として展開された経過を詳細に追跡する。そして宣長の皇国主義的な日本神話の絶対視に対して、秋成がもちえた自国（日本）やその神話への相対視、また蘭学的な知見にもとづく自国の地理的な位置の客観視を筆者は高く評価する。この秋成の視線のうちに、たとえ直接に言及されることがなくとも、朝鮮は固有の価値をもって存在していることを筆者はいう。

第三章 秋成と世界

本章は本論文の結論として、秋成が宣長との論争において示した自国（日本）を相対視し、客観視する態度を、秋成の他の諸発言、その人生態度を通して検証する。壬辰倭乱をもたらした秀吉の権力志向を批判する秋成に強い共感を示しながら筆者は、宣長との論争過程で「書典はいつも一國一天地」であることをいう秋成の発言に、世界におけるそれぞれの国の独自性を認め、互いに共存するものであることをいおうとする秋成の意思を確認して本章を閉じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世18世紀に成立する国学思想が、そしてその国学思想に後世から向ける研究者の視線があえて直面することのなかった、あるいはむしろ隠し、伏せてきたとみなされる〈朝鮮問題〉を顕在化させることで、国学思想を問い直そうとした力作である。本論文の功績は何よりもまずこの国学と国学研究とが隠蔽してきた〈朝鮮問題〉の重大性を指摘し、日本の研究者の無自覚的な盲点を衝いた点に求められる。近世18世紀に成立する国学思想は、強い自国意識と自己言及的な言説をもって特質づけられる。国学におけるこの自国意識と自己言及的な言説の成立によって常に中国が異国としてあり、この異国を否定的な他者ととらえることで国学における皇国主義的な自国意識の成立があったと説かれてきた。だがこの自国意識の成立を見る視線のどこにも朝鮮は存在しない。研究者はその研究対象である国学者とともに朝鮮をその視角から落し、日本とその文化の固有性を強く志向する国学にとって〈朝鮮問題〉がもつ重大性をあえて見ようとしてこなかったといえる。

「記紀」成立の背景にある日本の古代国家の政治的、文化的な自立は、古代朝鮮との政治的、文化的な連関からの自立の過程といえるはずであり、だからこそ日本とその文化の固有性を志向する国学者はその日本古代に向けられた視線からこの朝鮮を抹消してきたのである。本論文が詳細に描き出したように、日本の古代にとっても朝鮮の重

大性を指摘した藤貞幹の『衝口発』に本居宣長は狼狽し、感情的な反発を見せる。この宣長の過剰な反応自体が、隠蔽された〈朝鮮問題〉の重大性を告げているのである。本論文はこの〈朝鮮問題〉に端を発した宣長と秋成との間に交わされた論争を詳細に追跡し、宣長と秋成の国学的言説の差異を描き出して本論文の第二の功績をなしている。

〈朝鮮問題〉に端を発したこの宣長・秋成論争はだが〈朝鮮問題〉に直接することはなく、それをいわば背後に追いやって、自国（日本）への優越的視線の当否をめぐる論を究極の問題として展開される。本論文は国学における〈朝鮮問題〉を国学への重要な視角としてとりあげるわけだが、しかしその〈朝鮮問題〉は国学者があえて直面することを避け、伏せてしまった問題としてしか本論文上には登場しない。この問題の隠蔽と、それへの主題的言及の欠如こそが、むしろ国学における〈朝鮮問題〉であるとみなされるのである。そうであるならば、〈朝鮮問題〉を隠蔽し、古代に向けられた視線からそれを抹消することで成立する国学の、その言説的機制を徹底して明かにする方向と方法とを筆者はとるべきであったであろう。その方向をとることで本論は、なお〈朝鮮問題〉を隠蔽し続ける後世の日本への強力な批判ともなりえたであろう。だが本論は〈朝鮮問題〉の国学者における言及上の欠如と空白を補うようにして、宣長と秋成との思想的な体質の違い、彼らの古代観、神話観、世界観等々の対比に大きな力を注いでいる。たしかにその詳細な対比は、近世の国学思想における差異を明かにし、宣長に見る皇国主義的言説を相対化する上で貴重ではある。しかし〈朝鮮問題〉を重要な視角とした本論における、その主題の空白を補うかのごとき如上の議論の展開は、筆者における方法上の再検討をうながしている。また藤貞幹の『衝口発』は、その背景に古代朝鮮の歴史的、言語的な認識を包括的に受け入れうる知が存在したことを告げている。むしろ〈朝鮮問題〉の隠蔽は、その『衝口発』に狼狽し、それに過剰に反応した国学に始まるといえるのである。とすれば『衝口発』をはさんだ知の位相の差異を明かにすることもまた筆者に果すべき課題であるだろう。そうした課題を果すためにも筆者における方法上の吟味が要請される。

筆者は本論文の主題「上田秋成の研究」にしたがって、秋成の思想的立場の解明に大きな力を注ぎ、そして秋成の思想的立場に多くの肯定的評価を与えている。しかしその「近代性」をいい、「国際性」をいう秋成評価の言は、やや安易にすぎ、既成の評価の言を繰り返しているとも思われる。それはせっきくの努力からなる論文の価値を軽減させるものである。歴史における言説への筆者のより周到な認識が要請されるゆえんである。だが韓国の研究者として日本文学を研究する筆者が、自国（日本）への視点を相対化し、また客観化して皇国主義者宣長に鋭く対立した上田秋成という近世における稀な文学者・国学者に、強い思い入れをもって対したことは十分に理解しうることである。「上田秋成の研究」と題した本論文は、筆者の秋成への強い共感に支えられている。しかし本論文にかかわって韓国の研究者としての立場をいうならば、その立場にしてはじめて指摘しえた国学研究における〈朝鮮問題〉という視角のもつ重大性を、あらためてここで確認すべきだろう。そのことは、日本研究にとっての外部的視点の重要性をあらためて私たちに教えている。国学研究にとってこの重大にして貴重な視角と、そこから派生する多くの問題の提示と、宣長・秋成の論争過程の詳細にして重厚な追跡とによって本論文は十分に学位に値する。

本委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。